

## 『<sup>たんにしょう</sup>歎異抄』のおはなし⑩第九条-1 念仏を喜べない私だから救われる

今回の第九条は少し長いので、二回に分けてお話します。

そしてこの第九条には、ある意味で『歎異抄』のクライマックスのひとつと思われる山場の場面が出てまいります。そこでは親鸞聖人と唯円房との対話が、リアルかつドラマチックに展開します。親鸞聖人のお弟子さんのお一人である唯円房が、親鸞聖人に信仰上の二つの疑問を問いただし、親鸞聖人がそれに対してお答えされる場面です。

今日はその二つの質問のうちの最初のひとつを、じっくり拝読したいと思います。

「<sup>ねんぶつ</sup>念仏まうしきふらへども、<sup>ゆやくかんぎ</sup>踊躍歓喜のころ、をろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、<sup>しんらん</sup>親鸞もこの<sup>ふしん</sup>不審ありつるに、<sup>ゆいえんぼう</sup>唯円房おなじころにてありけり。」

「踊躍歓喜」というのは、心身全体で躍り上がるほどの最高の喜びのことです。

「をろそか」は、少ない、通りいっぺん、なおざり、疎か、不十分という意味です。

「いかにと…やらん」とは、一体どうしたことでしょうか、という意味になります。

「まうしいれて」は、お尋ねして、ということです。

「不審」は、疑わしいこと、疑問に思うことです。

「唯円房」は、この『歎異抄』の著者とされる親鸞聖人の弟子の名前です。

(現代語訳)

〈念仏を申しておりますしても、躍り上がるような喜びの心がそれほど湧いてきませんし、また少しでも早く浄土に往生したいと願う心も起こりません。これは一体、どうしたことでしょうかと親鸞聖人にお尋ねしたところ、聖人は次のようにお答えになりました。この親鸞も、なぜだろうかと不審に思っていたのですが、唯円房よ、あなたも同じ思いだったのですね。〉

## ◎ 「踊躍歡喜」

「踊躍歡喜」という言葉ですが、『大無量寿經』や親鸞聖人がお書きになられた『教行信証』を始めとするお聖教しょうぎょうには、「歡喜踊躍かんぎゆやく」という言葉がしばしば出てまいります。

親鸞聖人は、『一念多念文意』というお書き物の中で、次のように書かれています。

「歡」は身をよろこばしむるなり、「喜」は心によろこばしむるなり」

「踊ゆ」は天にをどるといふ、「躍やく」は地にをどるといふ、よろこぶ心の極まりなきかたちなり。」

ですから踊躍歡喜とは、身と心から本当に大喜びして、天に踊り、地に躍り上がるほどの大きな喜びのことです。

## ◎ 唯円房の悩みと疑問

唯円房は、念仏すれば喜びがあふれてくるということを十分に理解していたにもかかわらず、念仏しても、自分にはちっとも喜びがあふれてこないし、早く浄土に行きたいという気持ちが起こらないことを、おそらくずっと悩んでいたのでしょう。

そして唯円房は、「念仏もうしそうらえども」と言っていますから、既に念仏を申す身になっていることは確かです。念仏を全く称えない人が、念仏を称えたらどうなるのかと聞いているのではなく、これはすでに念仏を称えている人の質問で、絶えず念仏を申した上でなおかつ浮かんでくる疑問です。これは、全く無信心の人にはできない相談です。

この自分の悩みと不安を、唯円房は親鸞聖人に、おそろおそろ、率直に、そしておそらくかなりの覚悟と勇気をもって相談されます。

## ◎ 『歎異抄』 著者が唯円房であることの証拠

そしてここに「唯円房おなじころにてありけり。」という一文があるところから、著者の唯円房が、『歎異抄』の中で初めてリアルに姿を現します。

『歎異抄』は親鸞聖人の孫である如信上人にょしんや、本願寺第三世で親鸞聖人の曾孫ひまごの覚如上人かくによが書いたとする説もありますが、『歎異抄』の著者が唯円房ではないだろうかと言われるようになったのは、この一文からきています。

親鸞聖人は、話しかけておられる相手の名前を、親しみを込めてはっきりとここで出しておられるのです。

このために、ほぼ決定的に、『歎異抄』の著者は唯円であろうということに決着します。

この後の第十三条にも、唯円房の名前が出てくる部分がありますから（「またあるとき、唯円房はわがいふことば信ずるかとおほせのさふらひしあひだ…」）、そこからも、『歎異抄』の著者が唯円房であることの証拠とされるようになりました。

## ◎親鸞聖人の驚くべきお答え「唯円房おなじころにてありけり」

そしてここで、『歎異抄』のクライマックスのひとつといえる場面に達します。唯円房が親鸞聖人に向かって質問をした時、それに対して親鸞聖人は、ある意味で大変ショッキングなお答えをされるわけです。

それは、この私もおかしいなと思っていたのですが、唯円房も同じ気持ちを抱いていたのですね、と。わしもそうなんだ、と。

人には念仏を勧めているのに、親鸞聖人ご自身も、念仏してもさっぱり踊躍歓喜の心が起きず、急いで浄土に行きたくないのは、唯円房と同じだということです。

これは私たちの誰もが抱く、共感できる疑問かもしれません。

唯円房は私たちの代表選手として、親鸞聖人にこのような質問をしてくださったともいえるかもしれません。

そして唯円房も、おそらく親鸞聖人のお答えを聞いて、「えっ!？」と驚かれたのではないのでしょうか。聖人に怒られるのではないかとビクビクしていた唯円房も、さぞかしびっくりしたことでしょう。浄土往生の最も熱心な説法者が、念仏を喜ばず、浄土往生を喜ばないというのですから、これは驚いて当然です。

「親鸞も」と言われたのですから、親鸞聖人も唯円房と同じところまで降りてきてくださって、唯円房に寄り添うように、わたしも同じ心だと言ってくださったのです。そして唯円房の「不審」を聖人も共有しておられるのです。

しかし親鸞聖人は唯円房と違って、この不審があっても、ちゃんと落ち着いた心持ちになられています。一方の唯円房は、そこに心配と不安の心を抱いています。ここに親鸞聖人の安心あんじんと唯円房の不安との違いがあります。

この意外な答えに驚く唯円房を尻目に、親鸞聖人はさらにパラドックス、逆説に満ちた言葉を語ります。

「よくよく案<sup>あん</sup>じみれば、天におどり、地におどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよいよ<sup>おうじょう いちじょう</sup>往生は一定とおもひたまふべきなり。」

「一定<sup>いちじょう</sup>」とは、決定していること、確かなことです。

(現代語訳)

〈よくよく考えてみますと、念仏を称えるのは天に踊り地に踊るほどに大喜びするべきことなのに、それが喜べないからこそ、私たちの極楽往生は、ますます間違いないと思うのです。〉

## ◎聖人の不思議なお答え「念仏を喜べないからこそ、救われる」

親鸞聖人は、恩師である法然上人の教えを体得されたお方であり、法然上人は、念仏を称える人は阿弥陀仏の力によって極楽浄土に往生することができるという信仰をお持ちの方です。

親鸞聖人は、その法然上人に心酔されておられたというのに、ここでは唯円房と同じ気持ちで、念仏してもちっとも嬉しくないし、浄土に行きたくもないというのです。これはちょっと宗教家の言葉とは思えませんね。

しかし聖人は、ここで説明します。

念仏を喜べないからこそ、救われるのです、と。

天地に躍り上がるほど喜ばなければならないことが喜べないことによって、いよいよ往生は確定的であると、こういう不思議なことを聖人は言われるのです。

「よろこぶべきところををさへて、よろこばせざるは煩惱<sup>ぼんのう しょい</sup>の所為なり。」

「煩惱」というのは、心身を悩まし苦しめ、知をさまたげる心のはたらきのことで、貪欲<sup>とんよく</sup>、瞋恚<sup>しんに</sup>、愚痴<sup>ぐち</sup>が三大煩惱として知られています。

「所為」は、しわざ、という意味です。

(現代語訳)

〈喜ぶべき心が抑えられて喜べないのは、私たちが持っている煩惱<sup>しわざ</sup>の仕業なのです。〉

## ◎煩惱のために念仏が喜べない

私たちの煩惱のせいで、喜ぶべき心が抑えられて喜べないのであり、そして喜べないからこそ、往生は一層確定的であると、このような不思議なことを、聖人は言われます。

煩惱というのは計らい、我執でもあり、阿弥陀仏の大慈悲の願心と私との間に壁を作ります。自分が一番偉くて正しいという思い上がりにとらわれの心が、念仏を喜べなくしているのです。

「しかるに<sup>ぶつ</sup>仏かねてしろしめして、<sup>ほんのうぐそく</sup>煩惱具足の<sup>ほんぶ</sup>凡夫とおほせられたることなれば、<sup>たりき</sup>他力の<sup>ひがん</sup>悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。」

「かねて」は、前もって、という意味です。

「しろしめして」というのは、知っていらっしゃって、見通されて、ということです。

「凡夫」は、おろかで無知なただの人ということで、これは「聖者」に対する言葉です。

「悲願」は、阿弥陀仏の本願のことで、慈悲にあふれた仏の願いです。

### (現代語訳)

〈ところがそのような煩惱に満ちた私どもであることを、阿弥陀仏はかねてから見抜いて知っておられて、私たちのことをあらゆる煩惱を身に備えた凡夫と仰せになっているのです。ですから阿弥陀仏の大慈悲の本願は、このような私どものためにこそ起こされたのだと気づかされ、如来の救いがますます<sup>たの</sup>頼もしく思われるのです。〉

## ◎煩惱が深いほど救われるというパラドックス

煩惱が深いからこそ、阿弥陀如来はこの私を救いの目当てとしてくださるのであり、煩惱が深ければ深いほど、仏様の方でも頑張って救おうとされるのです。

災害や事故などが起きて多数の怪我人や病人が出た時に、「トリアージ」といって、傷病者の緊急度や重症度に応じて適切な処置や搬送を行うために、傷病者に治療優先順位を決めています。救助隊の人は、重症の人ほど先に救助することになっています。

阿弥陀仏も、煩惱が深い人ほど憐みの心をもって、なんとか救いたいと願われているのではないだ

ろうかと思います。

ですから、そんな深い煩惱を抱えた者だからこそ、いよいよ往生は間違いないのだ、と聖人は言われます。このような者のためこそ阿弥陀仏の誓願だというのです。

## ◎「不審」のあるままに摂取されて救われるのが、本願念仏

他力すなわち阿弥陀仏の大悲の願は、阿弥陀如来の大いなる慈悲の心から起こされた本願です。すべての人を救いたいという願いは、このように煩惱にまみれた私たちのためであったということが知らされて、ますますたのもしく思われるというのです。

ですから「不審」のあるままに摂取されて救われるのが、本願念仏なのです。

もし人間に煩惱がなければ、阿弥陀仏の大慈悲は起こされなかったことでしょう。救われなければならない人間がいるということが、阿弥陀仏の本願が起こされたそもそもの原因であるのです。そして煩惱のある身であるがために、「不審」や疑いはつきものなのです。「不審」がなくなって、疑いが解決されてしまうならば、その人にはもはや阿弥陀仏の救いなど不必要になるのではないのでしょうか。しかし人間である以上、どんな人も死ぬまで煩惱から逃れることができないのが人間の本性です。親鸞聖人はそのあたりを深く見つめられた方でした。

## ◎凡夫のあり方と念仏

親鸞聖人は『一念多念文意』において、凡夫のあり方を次のように書かれています。

「<sup>ほんぶ</sup>凡夫」といふは、<sup>むみょう</sup>無明・<sup>ぼんのう</sup>煩惱われらが身にみちみちて、<sup>いか</sup>欲もおほく、<sup>い</sup>瞋り腹だち、<sup>そねみねたむ</sup>心多くひまなくして、<sup>りんじゅう</sup>臨終の一念に至るまで<sup>とど</sup>止まらず消えず絶えず」

これによると、凡夫というのは無知・無明と煩惱にまみれ、それを生涯捨てきれない人間であり、果てしない欲望と、怒りと腹立ちの心である<sup>しんに</sup>瞋恚、<sup>そねみねたむ</sup>心に支配されて、臨終の一瞬に至っても、そこから脱することができないといえます。ちょっと耳が痛いですね。

そのような凡夫であっても、阿弥陀仏の本願を心から信じて念仏を称えようという気持ちになった者は、阿弥陀仏の摂取不捨（おさめ取って捨てない）の願に迎え取られて、浄土に往生することが決定した位、すなわち<sup>しょうじょうしゅ</sup>正定聚の位につくのです。

真の信心を獲ることができたなら、その段階ですでに往生を約束されるのです。

## ◎凡夫と煩惱

しかし往生を約束されるということは、その時点で凡夫が悟りを得て、煩惱のない境地に至ることではありません。凡夫は、往生を約束された後も、煩惱を抱き続けるのです。臨終に至るまで、煩惱はどこまでも燃え盛ったままであり、決して終息することはありません。

凡夫は往生が約束された状態の下でも、なお煩惱を捨て去ることができず、怒りの心である瞋恚や嫉妬にとらわれているのです。

親鸞聖人は、このようなあさましい姿を、ご自身の内面を厳しく凝視しながら見据えていたのです。しかしそのようなあさましい凡夫は、そのあさましさのゆえに、さらにいっそう自己の往生を確信できるというのです。

## ◎煩惱と救い

「かくのごときのわれら」というのは、私は何も悪いことをしていませんという善人ぶった私ではなく、人間のような姿をしているけれどもあさましい自分です。

救われなければならないのはこの自分だと納得できた自分、それがまさしく本願のお目当てです。

私のようなものを助けたいと思って起こしてくださった阿弥陀仏の他力の悲願ですから、阿弥陀如来の真のお心を知るならば、いよいよたのもしく思われるではないかと言って、聖人は唯円房を諭されるのです。

「救われた」という思いが起こるのは、救い取った本願の真実がこの身に届いた証拠ですから、そこにはおのずから喜びがあふれ出て、感謝と喜びの念仏が称えられてきます。

けれども、その喜びがいつまでも持続しないのが、私たち人間の本性です。

## ◎妙好人・浅原才市の歌

人間の心は、ころころ変わるものです。

妙好人として知られる浅原才市さんの歌に、次のようなものがあります。

「こころ ころころ ころころで  
六字のなかで こころころころ  
これがたのしみ なむあみだぶつ」

まるで言葉遊びのようですが、こころころ移り変わって定まりをもたない私たちの心を捉えた、巧みな言葉です。

私たちの煩悩がどれだけ妨げになっても、阿弥陀仏の本願力は、私たちを煩悩ある者として、そのまま、あるがままに救い取ってくださるのです。

この第九条では、親鸞聖人の説く「煩悩と救い」の関係を知ることができると思います。唯円房の告白と聖人との対話のおかげで、それがリアルに伝わってきます。そして親鸞聖人がとても身近に感じられるのではないかと思います。

唯円房は、まさか聖人から「そうか、私もだ」という意外な答えが返ってくるとは予想していなかったことでしょう。

「へえー、親鸞聖人って、こんなことを言う人だったんだ！」ということを知ることができます。

今回は、新型コロナウイルスの再流行がない限りは、11月23日の報恩講の時に、第九条の後半、唯円房の親鸞聖人へのもうひとつの質問について拝読したいと思います。

ご清聴ありがとうございました。